

イバン染織布プア・クンプに関する研究

長谷川悟郎(京都大学大学院院生)

本稿では、サラワク州のイバン染織布プア・クンプに関するこれまで展開されてきた研究の課題を明確にするとともに、筆者の考える社会・文化的側面からの研究アプローチについて紹介させていただきたい。プア・クンプ(*pua' kumbu*)とは、サイズがおよそ120cm×240cmのイカット技法によってつくられるブランケットである[Gavin 2003:1]。*pua*は「ブランケット」を、*kumbu*は「覆う」「包む」を意味する[Linggi 2001b:1489]。しかし染織工程において *kumbu*はイカット(*kebat*, 動詞は *ngebat*)を示す語である[Richards 1981]。マレーシアで、プア・クンプは、トレンガヌ州やクランタン州のマレー人がつくるパティックやソンケットとならぶ国を代表する物質文化に位置づけられる。その特有の視覚的イメージは、サラワクのみならず、多文化社会を謳うマレーシアの象徴として観光パンフレットなどに扱われる。またカーペットなど工業製産品のデザインにも応用され、今日国内のホテルなどで広く利用されている[Leigh 2000:46]。

イバン染織布のこれまでの研究

これまでイバンの染織布に関する研究は、技法や布を構成するパターンの象徴論的意味の解釈といった美学的アプローチが展開され、染織布の社会・文化的相関性について十分な考察はおこなわれてこなかった。このような流れの背景には1936年に出版されたハドン[Haddon and Start 1936]の先駆的な調査研究がある。ハドンが率いる英国ケンブリッジ大学の人類学研究グループは、1898年にトレス海峡とニューギニア方面の調査へ赴き、この行程のおわりにサラワクから多くのイバン染織布などの資料を入手している。そして、染織技法、模様デザインに具現化されるイバンの美学について分類同定をおこなった。ハドンのおもな関心は、布に描かれる鹿やトガリネズミ、鷹といったモチーフは極度に具象性を失い、なぜ見た目には同定不可能なレベルにまで模様化されているのかという点にあった。ハドンはこのような現象について、本来先祖代々継承されてきた伝統的織り模様にそなわっていた写実的類似性は退廃し失われていったと説明した[Haddon and Start 1936:xiii; Gavin 2003:198]。ハドンのこういった進化論的関心は、1890年代当時の民族誌研究と美術史思想における「芸術の起源」に対する議論が背景にあった。この「芸術の起源」に関する議論では、デザインとはたんに装飾機能をもつだけでなく、そこには象徴的意味がふくまれると捉えられていた。美術史において「デザインはかつて記号として機能した」と信じられていたように、イバンのテキスタイルに織りこまれるデザインは、当時のハドンによって無文字社会の原始的言語として捉えられていたのである[Gavin 2003:200-201]。

プア・クンプは、その後戦争をはさみ1970年代からインドネシアの民族染織布の一部として欧米のアート市場において注目されるようになり、いくつかの研究が取り上げられていった[e.g. Fischer(ed.)1979; Gittinger 1979;1980]。しかしこれら1970～1980年代の研究においてもハドンの研究に立脚し、その象徴論的アプローチを通念化させていったものにすぎない。ここではプア・クンプの説明についてハドンのおかした決定的な間違いが繰り返されている。それは、布に織り込まれる人物や祖霊、神霊などの霊的威力のつよいモチーフは、コミュニティにおける権力者の妻や娘だけがあつかうことができるのべた点である[cf. Palmieri and Ferentinos 1979:74; Gittinger 1979:221]。しかしこのよう

なハッドンがイバン社会のなかに理解した階層制とは、その後 1949 年にはじめて社会人類学的調査をおこなったフリーマンによって否定され、それ以降すでにイバン社会は平等制によって特徴づけられていることが論じられてきたのである [cf. Freeman 1955:10]¹。

さらに近年の研究では、1986 年から 1991 年にかけてのべ 2 年間、カピット管区のバレー流域を拠点としてサラワク広域の調査をおこなったガヴィン [Gavin 1991; 1996; 2003] に注目したい。ガヴィンは、当時バレーでは、社会威信をもとめる女の重要な活動として、染織は伝統的に根づよくおこなわれていたと説明する [Gavin 1991:13]。彼女はフィールドワークをはじめた当初、ハッドンのように染織布に埋め込まれ記号化された象徴論的意味を読みとろうとしたが、結局このアプローチが調査を困難にさせていたことに気づいたという。またプア・クンプの社会的関連性について興味ぶかいつぎの点があきらかにされた。彼女がインフォマントから密かに告げられたのは「イバンの男は首狩りであり、そして女は染織である。染織は首狩りのコンテキスト外では理解出来るものではない」という織り手らのルールであった。ところが、かつて行われていた原始的な首狩り慣習については、近代的学校教育を修めていた多くの織り手にとって話題にあげることさえも敬遠されていた。このように、首狩りのコンテキストと同様に、織り手たちは自分らがつくる布について公然と口外して語るができないという [Gavin 1996:13]。このようなガヴィンの見解に従えば、現在でもプア・クンプは、イバンにとって、かつてのような首級を受納するための「首狩りの布」とみなされつづけていることになる。

媒染儀礼ンガールと女の位階序列

イバン社会は平等主義によって特徴づけられていることが定説とされてきた。ところが女のあいだでは、染織の「染匠」(糸の扱いを知り、媒染材料の調合を知る女: *indu nakar indu gaar*) を中心として社会的な位階序列が形成されてきたことが知られている。ジャブーによると、この位階は染匠を最高位とするつぎの 5 段階に分類される [Jabu 1989:95; 1991:80]。

- ① 「糸の扱いを知り、媒色材料の調合を知る女」 (*indu nakar indu gaar*)、
- ② 「新たなデザインを創案する女」 (*indu nengkebang indu muntang*) と称され、夢見を通して神霊から承認をえた織り手、
- ③ 「熟練した織り手」 (*indu sikat indu kebat*)、

¹ フリーマンの重要な指摘は、ロングハウス・コミュニティとは、じつは社会経済的にそれぞれ独立した「ビレック家族 (*bilek family*)」の集合体であり、そこには制度化された従属関係はなく、すべてのビレックと個々人がアダットのもとに平等 (*sebaka*) だという点である。そしてそれぞれのイバンは高度に個人主義かつ競争的で、誇りたかく、それぞれがそれぞれの判断にしたがって行動をとる。このフリーマンの研究によって、イバン社会は「階級制度をもたず平等である」 (*classless and egalitarian*) ことが定説のように語られてきた [Freeman 1955; 1970]。しかしいっぽうでは、このイバンの平等主義について、イバン社会の研究者にとって疑問でもありつづけてきた。サンディン [Sandin 1968] やモーガン [Morgan 1968]、プリングル [Pringle 1970]、ルソー [Rousseau 1990] らが逆説を展開し、またイエンゼン [Jensen 1974:22] やキング [King 1993:197] が違和感をのべている。そしてセイザーは、イバンにとっての平等性 (*equality*) とは、不平等 (*inequality*) を獲得するための前提条件とし、それぞれ相反するものではなく、論理的に関連した概念であるとのべ、イバンの平等主義をイバンの特有の概念として解釈した [Sather 1996]。

- ④「家庭内の世話をよくする女」(*indu temuai indu lawai; indu asi indu ai*)、
- ⑤「普通の主婦」(*indu paku indu tubu*)

ここでは具体的に染匠について説明する。イバン染織で従来もちいられる主な染料植物は、深紅色をつくるウンクドゥ(ヤエヤマアオキ:*Morinda citrifolia: engkudu*)の根や、赤茶色をつくるウンカレバイ(*Phychotria vividifloria: engkerebai*)の葉、スパンキ(*Tristaniopsis spp., Myrt: sebangki*)、そして藍色をつくるタルム(*Marsdenia tinctoria: tarum*)の葉などがある。このなかでウンクドゥによる深紅色の染めは、固有の媒染(染料を媒介させるための糸繊維の下処理工程)技術をもちいることで得られる。この工程を経て、子孫へ受け継ぐことの出来る堅牢度のたかい貴重な深紅色を綿糸に染めるのである[Linggi 2001a:7]。この媒染技術はナカール(*nakar*)と呼ばれるが、儀礼化されることによって後世に伝えられてきた。この儀礼化されたものはンガール(*ngar*: またはガール *gaar*)とよばれる[Gavin 1991:1]。ンガールでは、塩や野生のショウガ、木の実、油などさまざまな材料が調合され、そして祖先の霊を介した作業がロングハウスの女たちだけで厳粛におこなわれる。染匠だけがその儀礼工程を知り、そして工程のすべてを仕切る[Linggi 2001a:2]。彼女の指示のもとに、ロングハウスコミュニティの女が一堂になって協力し、およそ一週間の工程がすすめられる。多くの綿糸がコミュニティすべての織り手から持ち寄られ、調合された媒染液に浸けられた後、日差しと夜露(*embun*)に昼夜くりかえしさらされる。最終的に得られる深紅色は、材料の調合はもちろん、天候や霊的庇護の度合いによって左右される[Gavin 1991:24; Linggi 2001a:6-7]。ンガールを経た糸は、唯一ウンクドゥを染めることのできる「熟した糸」(*ubong mansau*)となる。ウンカレバイなどで染める赤茶色と比べてより卓越した価値がおかれるのである[Gavin 1991:31n.1]。

そして、ンガールの儀礼工程とは、イバンの女にとって男の首狩りに匹敵し、工程中に打ち負かされ、衰弱し、病死をまねくなど生命のリスクとともに、多くの厳格な禁忌をとまう。そのため「女の出陣」(*kayau indu: warpath of women*)ともよばれ、さまざまな悪霊に打ち勝つ勇敢さがもとめられる。とくに全体を指揮する染匠は、戦闘の統率者と同位とみなされ、神霊の庇護のもとにンガールを執行する[Gavin 1996:27]。

このように、ンガールを執行する染匠は織り手として、また社会の一員としてこの上ない究極の威信が与えられるのである。しかし染匠は、技術的にもっともすぐれた布を織るとはかぎらない。ここでの社会的信望の対象とは、夢見をとおして神霊から選ばれ、霊的能力をさずかったコミュニティ内で唯一の織り手なのである[Linggi 2001a:2,7]。ガヴィンによれば、基本的にほとんどの織り手が媒染の調合を技術的に理解しているものの、しかし霊的な導きを獲得するには至らないという[Gavin 1991:1]。かつて19世紀後半の記録によれば、せいぜい50人中1人の割合とされている[Haddon and Start 1936:21-22]。この数は、平均的なロングハウスコミュニティ1つに対して1人の割合とみることができる。

研究の視点

イバンにとってプア・クンプなどの染織布は、日常の生活の中心に位置づけられ、外部社会へ持ち出されることもなく、ほぼ例外なく儀礼の機会にのみ用いられてきた[Gittinger 1979:213]。たとえば、かつては、女が首狩りから帰還する男の偉業を讃えて踊りを舞い、

唄い、そして首級を包んで受納するためにもちいた[Linggi 2001a:2-7]。また、新生児の出生直後の産湯や祖父母への初披露、子どもの養子縁組み手続き、婚礼、開墾の際の「砥石儀礼」、治癒の儀式など、イバンの日常的な農耕儀礼や治癒の儀式、人生の通過儀礼などの場でもちいられた[Linggi 2001b:1488; Vogelsanger 1980:119]。

このように染織布はイバンの社会生活のなかで極めて高い社会的価値がおかれ、また染織活動は女の位階序列の上位3つを占めたのである。かつて男はあらたな土地をもとめ原生林を開拓し、また首狩りで首級を得ること、そして女は機織りに傑出することが模範とされた[Gavin 1996:26-7]。さらに女自身も、嫁入りまでに一枚のフルサイズ(およそ120×240cm)のプア・クンプを織り上げる技能の習得をもとめた[Munan 1989:70-71; King 1993:250]。そしてイバンの伝統社会では、プア・クンプやジャケット、スカート、マット、バスケットなどの手工芸をつくる技能にくわえ、家事をこなす能力は男から尊重され、そして婚姻相手として高い価値がおかれてきた[Masing 1997:107n.8]。ようするに、イバンの女にとって染織や手工芸づくりとは、社会的意義がとよく反映された社会行為であり、社会活動の真髄として扱われてきたのである。

ところが、今日プア・クンプづくりの工程では、化学染料がひろく用いられ、媒染工程の必要性は希薄なものとなっている。そのような状況のなかで、かつての最高ステータスがどのように変遷したかについてはいっさい知られていない[Mashman 1991:263]。また、かつて多くのプア・クンプが蒐集されたサリバス県区では、染織はほとんど衰退し、染織の社会的意義がどのように変遷したかについてもまったく明らかにされていないのである。

イバン社会における伝統文化の衰退に関して、これまでイバン社会の研究者によって、近代化と関連して興味ぶかい点のがべられてきた。その1つは、かつて人口調査が広範囲かつ体系的におこなわれるようになったマレーシア国家の成立以降、イバンの伝統社会は急速な衰退と人口の減少が予測されてきたことである[cf. Jones 1966; Lee 1970]。ところが、実際にはイバンの人口は今日にいたるまで増加をつづけ、サラワクで最大数を保持しつづけている。また衰退の危機に瀕しているとされたイバンの伝統文化も、意外に根づよく残されてきた。クディットは、博物館のサルベージ・プロジェクトとして、イバンの最大規模の儀礼の1つであるガワイ・クニャラン(*Gawai Kenyalang*)の記録映像制作をおこなった。しかしイバンの実際の社会のなかでは、ガワイ・クニャラン以外にも多くのさまざまな儀礼が存在しおこなわれていたことがわかったという[Kedit 1993:6]。またマシンも同様に、かつての戦争や首狩りと密接なかたちでいとなまれてきたイバンの伝統の儀礼や祈祷唄とは、その後も時代の要請に対応し役割を変えながら現代まで継続発展しつづけている実態を報告した[Masing 1997]。ガワイという公の祭儀で称賛されたかつての首狩りの闘士は、今日では政治やビジネスの分野で成功する男たちである。そのような男を讃え、ロングハウスのコミュニティ住人は一丸となり社会的威信を承認する。主催する家族とコミュニティは、遠方地域からも親族や友人をまねき、事前に準備した十分な食事と酒をふるまう。またそこでは、招かれた神霊が壁に無数に飾られたプア・クンプを観覧して満喫するのである[Vogelsanger 1980:118]。

ガヴィンがのべた、プア・クンプが「首狩りの布」として説明をもとめることができない状況とは研究の1つの限界点をしめすものであり、これを超越することが、プア・クンプ

にかんする語りの幅をひろげ、また研究の展開を導くものと筆者はかんがえている。具体的には、刻々と変化する社会との関連性に注目し、プア・クンプの社会にうめこまれた状態をとらえ、それによって染織文化を衰退または継承させる主体である社会的仕組みを理解することだとイメージしている。

関本は、これまでのテキスタイル研究のありかたについて、染織はたんなる女の娯楽とみなされ、布は過去の遺産としてノスタルジックな視線をなげかけるような固定観念に支配されたことにより、社会科学的な考察が十分になされてこなかったという [Sekimoto 2000:1-3]。社会科学的な考察とは、モールマンの「人びとは手工芸をつくり、そしてまたそれによって人びとはつくられる」という視点とむすびつく。モールマンは、社会のなかでさまざまな役割が期待される手工芸の生産を、民族性やジェンダー、ステータス、社会階層などと関連した社会行為としてとらえ、またさらに創作者自身のアイデンティティ形成のプロセスと関連させることができると説明する。そして手工芸をとりまく状況が商業化などによって変化すると、それと同時に手自身のアイデンティティやステータスもあらゆる可能性のもとに変化するのである [Mohlman 1999:114]。こういった社会・文化的諸側面への視点は、染織の今後の発展をもとめるうえでも重要であると筆者はかんがえている。

まとめと研究の課題

近年では、プア・クンプなどの手工芸品生産にたいして行政や民間ビジネスからの積極的な要望がある。このような状況のなかで、筆者は 2003 年に 12 ヶ月間の広域調査をおこなった¹。そこでは、多くの織り手がプア・クンプを率先して販売したいと願っていることがわかった。ところが、プア・クンプの生産は農村の日常生活と密接不可分なたちでいとなまれているため、市場からの求めに応じた効率的な生産と市場への円滑な供給が困難な現実があった。サラワク州政府の意図とは裏腹に伝統手工芸の振興は思いのほかかどっていない。ワンは、マレーシアの行政による手工芸開発プロジェクトとは、農耕従事者に割り当てた経済支援策であり、アーティザンやクラフツマンとは、けっきょく農耕従事者 (agriculturalists) または農村労働者 (rural workers) とみなす思想が基本にあると指摘した [Wan 1996 : 4-5]。筆者が調査をおこなったカピット管区におけるプア・クンプ開発プロジェクトも、農業省が先導しておこなっている。また、プア・クンプをつくる織り手は、高齢者など身体的に不可能な者以外、ほぼ例外なく農耕をいとなみ、それによって自活用の米をまかなう。ところが、これらプア・クンプをつくる農耕従事者とは、行政がいづくイメージとは決定的に乖離する部分があるとおもわれる。じつは、村落社会における織り手とは、村落の有力者や富裕者を称賛するための祭儀など各種儀礼にもちいる布をつくり提供する人々だと考えられる。またこのような場を執り持つことのできるロングハウスコミュニティとは、換言すれば、地域のなかの有力村に位置するのではないだろうか。そこでは、地域を代表する卓越者を輩出することをコミュニティが一丸となってもとめ、そういった場で扱うプア・クンプを女たちはこぞって生産するのである。行政が貧困開発のツールとみなす染織手工芸とは、社会・文化をひろく見渡していくと、どうやら異なった性格をおびてみえてくる。

¹ 筆者は 2003 年 2 月から 12 ヶ月間シブ町に滞在し、サラワク手工芸の特にイバンの染織実践の現状について調査をおこなった。当調査は、(財)大阪国際交流センターの平成 14 年度「大阪アジアスカラシップ」プログラムにより実現することができた。また現地では、都市部に移住をおこなってきたイバンの社会的支援をおこなってきた非政府組織である Society Christian Service in Sibul に受け入れていただいた。

筆者は、本年中に、カピット管区バレー流域のロングハウスにて長期のフィールドワークを始める予定である。特にロングハウス内と地域の社会関係への理解をふかめることで、プア・クンプを生産する織り手個人とは社会のなかでどのように位置づけられているのか明らかにさせたい。

引用文献(アルファベット順):

Fischer, Joseph(ed.)

- 1979 *'Threads of Tradition: Textiles of Indonesia and Sarawak'*. Lowie Museum of Anthropology, University Art Museum, Berkeley, University of California, Berkeley, California.

Freeman, J. Derek

- 1955 *Iban Agruculture: A Report on the Shifting Cultivation of Hill Rice by the Iban of Sarawak*, London:Her Majesty's Stationery Office.
1970 *Report on the Iban of Sarawak*, London: Athlone Press.

Gavin, Traude

- 1991 'Kayau Indu, The Warpath of Women, A Ngar Ritual at Entawau, Balleh in October 1988'. In Sarawak Museum Journal No.63, December 1991: pp1-42.
1996 *The Women's Warpath: Iban Ritual Fabrics from Borneo*, 1996, UCLA Fowler Museum of Cultural History.
2003 *Iban ritual textiles*, Leiden: KITLV Press.

Gittinger, Mattiebelle

- 1979 *Splendid Symbols: Textile and Tradition in Indonesia*, Washington D.C: The Textile Museum.

Gittinger, Mattiebelle(et al.ed.s.)

- 1980 *Indonesian textiles: Irene Emery Roundtable on Museum Textiles, 1979 proceedings*, Washington D.C: The Textile Museum.

Haddon, Alfred C. and Stuart, Laura E.

- 1936 *Iban or Sea Dayak Fabrics and Their Pattern*, Cambridge: Cambridge University Press.

Jabu, Empiang

- 1989 'The Traditional Values and Functions of Pua Kumbu'. In Sarawak Museum Journal No.61(New Series). pp.93-97.
1991 'Pua Kumbu: The Pride of the Iban Cultural Heritage'. In Lucas Chin and Valerie Mashman(eds.), *Sarawak Cultural Legacy: A Living Tradition*, pp.75-89. Kuching: Society Atelier Sarawak.

Jensen, Erik

- 1974 *The Iban and Their Religion*, Oxford University Press.

Jones,LW

- 1966 *The Population of Borneo: A Study of the Peoples of Sarawak, Sabah and Brunei*, London: Athlone Press.

Kedit, Peter Mulok

- 1993 *Iban Bejalai*, Kuala Lumpur: Ampang Press.

King, Victor T.

- 1993 *The People of Borneo*, Oxford: Blackwell.

Lee, Yong Leng

- 1970 *Population and Settlement in Sarawak*, Singapore: Asia Pacific Press.

Leigh, Barbara

- 2000 *The Changing Face of Malaysian Crafts: Identity, Industry, and Ingenuity*, Oxford University Press.

Linggi, Datin Amar Margaret

- 2001a *Ties That Bind: Iban Ikat Weaving*, Kuching: The Tun Jugah Foundation in Cooperation with The Borneo Research Council, Inc.
2001b 'Pua' Kumbu'. In Sutlive and Sutlive (eds.) *The encyclopaedia of Iban studies: Iban history, society, and*

- culture*. pp.1488-1506. Kuching: Tun Jugah Foundation.
- Mashman, Valerie
- 1991 'Warriors and Weavers: A Study of Gender Relations Among The Iban of Sarawak'. In Vinson H. Sutlive(ed.), *Female and Male in Borneo: Contributions and Challenges to Gender Studies*. pp.231-270. Borneo Research Council, Williamsburg.
- Masing, James Jemut
- 1997 *The coming of the gods: an Iban invocatory chant (timang gawai amat) of the Baleh river region, Sarawak*; with a foreword by Derek Freeman, vol.1-2, Canberra: Dept. of Anthropology, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- Mohlman, Kay
- 1999 *Craft-as-Industry and Craft-as-Culture: Analysing Handicraft Production in Commercialized Asia and Beyond*, in Southeast Asian Journal of Social Science, Vol.27, Number1: pp.113-126.
- Morgan, Stephanie
- 1968 *Iban Expansion: Some Background Factors*. In Sarawak Museum Journal, Vol.XVI, Nos.32-33(New Series),pp.141-185.
- Munan, Heidi
- 1988 *Sarawak Crafts -Methods, Materials, Motifs*, Oxford University Press.
- Palmieri, Michael and Ferentinos, Fatima
- 1979 'The Iban Textiles of Sarawak'. In Joseph Fischer(ed.), *Threads of Tradition: Textiles of Indonesia and Sarawak*, pp.73-79, Lowie Museum of Anthropology, University Art Museum, Berkeley, University of California, Berkeley, California.
- Pringle, Robert
- 1970 *Rajahs and Rebels: The Ibans of Sarawak under Brooke Rule, 1841-1941*, London: Macmillan.
- Richards, Anthony
- 1981 *An Iban-English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.
- Rousseau, Jérôme
- 1990 *Central Borneo: Ethnic Identity and Social Life in a Stratified Society*, Oxford: Clarendon Press.
- Sandin, Benedict
- 1968 *The Sea Dayaks of Borneo: Before White Rajah Rule*. Michigan State University Press.
- Sather, Clifford
- 1996 "All Threads Are White": Iban Egalitarianism Reconsidered. In James J. Fox and Clifford Sather(ed.) *Origins, ancestry and alliance: explorations in Austronesian ethnography*. Canberra: Dept. of Anthropology, Australian National University.
- Sekimoto, Teruo
- 2000 'Preface'. In Teruo Sekimoto(ed.), *Handicrafts and Industrial Development in Southeast Asia: The Report of a Research Project Funded by Toyota Foundation Research Grant*, pp.1-3. Tokyo: Institute of Oriental Culture, University of Tokyo.
- Vogelsanger, Cornelia
- 1980 A sight for the Gods: Notes on the Social and Religious Meaning of Iban Fabrics. In Gittinger(ed.), *Indonesian Textile*: Washington D.C.: Textile Museum.
- Wan, Hashim Wan Teh
- 1996 *Malay Handicraft Industries: Origin and Development*, Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.